The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	Empirical Analyses of Monetary Union : The Case of the CFA Franc Zone
Author(s)	杉本, 喜美子
Citation	大阪大学, 2001, 博士論文
Version Type	
URL	https://hdl.handle.net/11094/42264
rights	
Note	著者からインターネット公開の許諾が得られていないため、論文の要旨のみを公開しています。全文のご利用をご希望の場合は、大阪大学の博士論文についてをご参照ください。

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

【4】

氏　　名	杉本喜美子（すぎもと きみこ）
博士の専攻分野の名称	博　士（経済学）
学位記番号	第　15934　号
学位授与年月日	平成13年3月23日
学位授与の要件	学位規則第4条第1項該当 経済学研究科経済理論専攻
学位論文名	Empirical Analyses of Monetary Union : The Case of the CFA Franc Zone
論文審査委員	（主査） 教　授　高木　信二 （副査） 教　授　橋本日出男　　教　授　伴　　金美

論文内容の要旨

本論文のねらいは、最新の計量経済学的手法を用い、国際マクロ経済学における近年の最重要テーマである通貨統合の経済効果を、西・中央アフリカの共通通貨圏（CFAフラン圏）のデータに基づいて実証分析することである。本論文では、(1)通貨需要関数の安定性、(2)輸入関数を通して示される共通通貨圏の保険機能、(3)最適通貨圏の内生性という3つのテーマが取り扱われている。いずれもCFAフラン圏の性格を特徴付ける上で重要な論点であり、アフリカにおける地域通貨統合の経済効果に関して新たな洞察を与える結果を提示している。

本論文は3章から構成されている。第1章では、共和分検定、誤差修正型モデルによって、CFAフラン圏全体、同圏を構成する2通貨同盟、および同圏の加盟各国ごとに通貨需要関数が推計され、その安定性が比較される。この分析によれば、最も構造的に安定的な通貨需要関数は圏全体のそれであることが示され、2つの中央銀行の存在にもかかわらず、CFAフラン圏が単一通貨圏として機能していること、すなわち、圏全体に一つの金融政策が存在することが望ましいことが示唆される。

第2章では、フランスによる交換性の保証が、CFAフラン圏各国において、異時点間の消費配分の効率化に資しているかが分析される。3つの異なったモデルを用い、個別の輸入需要関数およびパネルデータによる輸入需要関数を推定すると、外貨準備が輸入需要を決定する上で統計的に有意でないこと、換言すれば、外貨準備が輸入需要における流動性制約となっていないことが示される。すなわち、CFAフラン圏は、フランスによる交換性保証および共通通貨制度（外貨準備のプーリング）を通して、輸出の変動に対する保険機能を果たしていることが示される。

最後に、第3章では、Harvey型の単一変数（物価指数）の構造モデルを構築し、カルマンフィルターで推計した誤差分散を比較することによって、為替レート変動の非定常要因（購買力平価からの乖離要因）が非対称的な実物ショックに因ることが示される。さらに、構造多変数自己回帰（VAR）モデルによって、単一通貨圏が各国固有ショックの相関およびその反応の相関を高めていないことが示される。最近、最適通貨圏は内生的であるという議論が定説となりつつあるが、これらの結果は、CFAフラン圏においては、定説に反して、通貨統合が必ずしも経済統合に寄与しなかったことを示唆している。

論文審査の結果の要旨

本論文は、最新の計量経済学的手法を用い、国際マクロ経済学における近年の最重要テーマである通貨統合の経済効果を、西・中央アフリカの共通通貨圏（CFAフラン圏）のデータに基づいて実証分析するものである。通貨圏の貨幣的性格、保険機能、経済統合促進効果に関する3つの主要な実証結果はいずれも新しいものであり、本研究は文献に対する貢献として高く評価される。しかしながら、通貨統合に関する一般的結論を導き出そうという当初の意図に反して、本論文の結論は、CFAフラン圏に特有である。この意味で、本論文の正当な位置付けは、普遍的経済法の探求というより、西・中央アフリカ諸国における特定の経済制度の解釈にあると言えよう。この観点から言えば、実証結果をCFAフラン圏の制度的詳細に照らして解釈する努力、およびアフリカ地域研究文献との関連付けが不十分だという感を否めない。これは今後の課題であろう。とはいえ、このような問題にもかかわらず、本論文は、開放マクロ経済学およびアフリカ地域研究に対する意義ある貢献であり、博士（経済学）に十分に値するものと判断する。